

所以であると思います。

さて、観光では撮りつくされた感のある観光地であっても、ピーク時はずれた季節や、時間帯、その他撮影機材等の選択によってもオリジナリティーあふれる作品になり得る可能性もあると思います。観光地に限定することなく、広く観光の原点から観光産業と云うものまで解釈してのぞめば、意外に身近に被写体が存在するものです。

観光・産業に共通して云えることですが、撮影された写真を見た人達がそこに立つてみたいと思はせる様な感動を与えることこそ応募者に求められるものだと思います。私達の生きる北海道の魅力を表現するためには、皆さん一人一人の確かで個性的な視点と新しい未来の創造につながるような発見を表現されることを期待しております。

残された時間、入賞めざし、全力を傾注して、自信作を応募してください。

●第三部

三つの基本

■ 高橋 和幸

「ネイチャーフォト」は、野生生物、自然風景、自然現象と素材は多岐にわたりますが、私は、自然フィールドワークとして、山岳写真を撮り続けてきています。機会あるごとに先生方からご指導をいただいています。その経験をともにアドバイスができることがあればと考えまとめてみました。

心得ておきたいネイチャーフォト三つの基本は、①シャープに描写することです。そこで私

は出来る限り絞り込む様に心がけています。

シャッター速度は遅くなるので手振れ防止に三脚を使用しています。その他にも、高感度フィルムやデジタルカメラの感度を上げシャッター速度を速くしたり、手振れ補正機能を使う等の方法があります。②画面構成を考える。ファインダーから被写体をみた時、「写真は引き算」だと言われます。あれもこれもと欲張らず、どの部分をメイン(主役)に、どれを脇役にするかと言う画面構成が大事です。それによつて撮影意図が強調されます。③露出(写す明るさ)を決める。光と影を上手にコントロールすることで、立体感、質量感、そして、美しさが表現できます。撮影成功の絶対条件は、主役になる被写体に対し適正な露出(露出補正)が必要です。私の山岳写真では特に、朝夕の陽光を上手に生かすように努めています。

ネイチャーフォトで特に配慮が必要なのが、人の手が加えられた環境での撮影です。標識や木道を入れない、植樹された草木等、人工の物は写さないよう細心の注意を払ってフレーミングをすることです。ネイチャーとは、「自然のまま原始の状態、実物そのまま」とあります。加工されない自然そのものの姿を狙うことで、より以上の感動を伝える写真が撮れるのではないのでしょうか。

また、個性豊かに創意工夫をこらした、創造的な作品作りを取組むことが大切と考えます。ネイチャーフィールドで感動を与えられる魅力ある写真作りを期待しております。

▲ 支部探訪―道北

支部長 向井 和栄

私は年をとつても現役で頑張っており、上位入賞の時は支部長会議に出席するつもりですが何しろ入選もやつとで、支部長会議にも無沙汰いたしており、申し訳なく思っております。会の設立がハッキリしません、恥じておりますが、今古い会の書類を調べております。とりあえず、現在の道北支部の行動をお知らせ致します。

会員は二十年に大きな移動がありまして、亡くなられた方、高齢の方など三名の方が退会いたしました。今の会員は相談役、西野徳義氏、他男性五名、女性一名で合計七名となっております。支部会費は名寄市、下川町、士別市等に分かれていますので全員が一堂に集まることはなかなかできず、そのつど戴くようにしております。

例会、新年会、支部展、撮影会等行っておりますが撮影会は一年置きに実施、他のジャンル等と合同で行っております。従いまして五千円位の出費となります。

支部展は年に一度三月に合同展(日写連)下川町、名寄市で開催しております。例会は年に四回名寄市、下川町で交代して行っております。

私達郡部では、単独の活動は人員不足と会員の高齢化でとても困難です。そこで各クラブが協力して(二科会、日写連、道写協、フォト研究会、ニッコールクラブ)活動してい

ます。

人員不足、若い人の入会不足などがこれらの写真文化活動の問題と思っております。しかし、女性や若い人達はカメラを持っていきます。見込みはあると思います。また、コンテストにはよく応募しますが、道写協には入会してきません。道展に入選してもメリツトが無い、他のコンテストのように、時の人に審査していただきたいなどの願望が強く、他のニッコール、キャンノン、フジコン等に出品しているようです。

■写真展を終えて

大崎 和雄

会期 二〇〇九年十月六日～十四日
会場 新得町公民館

今回は七十歳を迎えたのを機に、最も大きな個展の開催を企画した。写真は「あな(穴)」をテーマに、過去に撮影した高速道路や発電所のトンネルから今春撮影のものなど四十五点、他にも一〇〇号以上の油彩画五十六点、俳句五十一句、詩七編、鉄道のレール等を再利用した「鉄のオブジェ」など、古希を機に集大成として念願の地元で作品を発表。身近な素材でも作品になる面白さを感じてもらえればと思います。